

視覚の継承と展開：渡辺省亭筆《群鳩浴水盤ノ図》をめぐる考察

末田泉名（京都大学）

渡辺省亭（1851-1918）は明治・大正期に活躍した日本画家として近年再評価著しい。「省亭風」とも呼ばれる写実的で瀟洒な花鳥画は比較的裕福な庶民の床間を飾る絵として愛好され、同時代画家からも高い評価を受けた。欧米では生前より一貫して高い評価を保ち続けた省亭だが、日本では長らく等閑視されてきた。関東大震災と続く戦災により作品の多くが焼失したと考えられてきたこと、さらに画壇と距離をとり、弟子も持たなかったとされる省亭の一種孤立した有り様が、従来の近代日本美術史の語りからの孤立を招いたとも言えよう。

省亭の写実的花鳥画様式は、しばしば洋風花鳥とも称されるように、西洋絵画との影響関係の中で捉えられてきた。これは日本画家として最初期にあたる明治11年（1879）年の渡仏を念頭においたものと言え、近年の研究もこれを踏襲する一方、洋行直前の明治10年（1878）作《群鳩浴水盤ノ図》に既に看取される高い写実性については十分な検討がなされていない。高階秀爾氏は幕末・明治初期における写実表現の追求の多くが陰影法・明暗法・遠近法といった西洋絵画特有の技法の消化・吸収に向かったと指摘したが、それはあくまでこの時代に勃興した多様な写実表現の一部を捉えたものにすぎない。特定の絵画が写実性を持つか否か以上に、それがいかなる写実性を持つかが、その作品の史的立ち位置の解明にとって本質的な重要性を持つのである。本発表は《群鳩浴水盤ノ図》の史的位置付けを明確化するとともに、本作の後に形成される省亭様式をめぐる議論の基盤を提供することを目指す。

本発表ではまず、本作の制作に係る省亭の証言を検証して画題の淵源を特定し、本作の実風景への忠実度を確認するとともに、その画題選択が浅草寺という場の文化的特質から見れば奇妙な匿名性を有すことを指摘する。次いで、省亭の関心の中心にあったと思われる光と影の描出について、江戸時代からの連続性を意識した上で、その特徴を論じる。本作における光は必ずしも写実や自然主義的表現に結びつけられるものではなく、むしろ作者の強い作為を感じさせるものとなっている。これにより本作の写実性に改めて疑問を投げかけるとともに、本作における光に、省亭の篤い観音信仰の反映を読み込み、新たな作品解釈の可能性を提示する。

帰結では《群鳩浴水盤ノ図》の画面が、必ずしも西洋の絵画技法を消化吸収したものではなく、江戸時代にすでに入り込み、ある程度内在化されていた写実表現や視覚と融合する形で独自の写実表現を生み出していった可能性、さらに匿名的と思われた本作の画面が、諸所において浅草寺とその周辺における近世以来の文化的遺産を受け継いでいる点を指摘する。これにより本作を渡辺省亭の画業の出発点と位置付けるに相応しい作例であると同時に、その後の画業ならびに「日本画」の形成に関する議論に新たな視座を投げかける重要な作例であることを提示し、論を閉じる。